

第 89 回麻布獣医学会 一般演題 7

中枢神経浸潤を生じた急性リンパ芽球性白血病の犬の 1 例

岡本 拓也¹, 伊藤 哲郎², 久末 正晴³, 根尾 櫻子⁴, 圓尾 拓也²¹ 麻布大学附属動物病院, ² 麻布大学附属動物病院小動物臨床研究室,
³ 麻布大学内科学第 2 研究室, ⁴ 麻布大学内科学第 2 研究室

【はじめに】犬の急性リンパ芽球性白血病 (acute lymphoblastic leukemia, 以下 ALL) は化学療法に対する反応性が乏しく寛解率は 30% 程度, 生存期間は 1-6 か月と考えられている。医学領域でも成人 ALL は未だ治癒困難な疾患と考えられているが, 一方で小児 ALL は現在では治療の進歩により 5 年生存率 90% を達成し, 寛解期の遅発性中枢神経浸潤が高頻度に発生することが知られている。今回, 我々は ALL の犬の 1 例において化学療法により 8 か月間の完全寛解を得た後に多発性中枢神経浸潤を経験したので概要を報告する。

【症例と臨床検査成績】症例は 5 歳齢, 未避妊雌のシェットランド・シープドッグ, 体重 6.3 kg であった。食欲・活動性の減退を主訴として近医を受診し, 発熱, 軽度の体表リンパ節腫大が認められた。1 か月間の治療により状態が改善されなかったため麻布大学附属動物病院内科に紹介された。本学初診時の血液検査では白血球数 $41,500/\mu\text{l}$ (リンパ芽球 $14,040/\mu\text{l}$ を含む), PCV 34.1%, 血小板数 $46,000/\mu\text{l}$ であり, 末梢血の遺伝子再構成解析において T 細胞のクローン性が確認された。骨髓検査では全有核細胞の 93.4% がリンパ芽球で構成され, 正常骨髓細胞は著しく減少していた。以上の所見から T 細胞性 ALL と診断した。

【治療経過】第 1 病日に静脈輸液, 抗生剤, 抗凝固剤等による十分な支持療法を行いながら L-アスパラ

ギナーゼ $10,000$ 単位 $/\text{m}^2$ を皮下投与後, COP プロトコルに準じて化学療法を開始した。第 2 病日から臨床症状の改善が認められ, 第 18 病日には白血球数が $14,560/\mu\text{l}$ まで減少し, リンパ芽球も消失して完全寛解が得られた。化学療法継続により寛解が維持されていたが, 第 240 病日頃より鼻腔閉塞症状が発現した。第 268 病日に頭部 CT 検査を実施し, 嗅球から鼻咽頭に ALL 浸潤病変が確認された。また第 299 病日には両後肢不全麻痺を認め, MRI 検査において第 4-6 腰髄領域に ALL 浸潤を疑う病変が確認された。同日の骨髓検査では腫瘍細胞は認められなかった。両病変ともに緩和的外部放射線照射により症状は改善され, 現在も治療を継続中である。

【考察】本症例は薬剤強度が低い多剤併用化学療法で比較的長い寛解が得られた。正確な理由は不明であるが, 医学領域で ALL 診断時の正の予後因子とされる若齢, 末梢血腫瘍細胞少数, 化学療法導入後の早期寛解にいずれも該当していた。小児 ALL では主軸となる化学療法剤がいずれも脳血液関門を通過しないため, 中枢神経に到達した少数の腫瘍細胞が治療期間に増殖し遅発性中枢神経浸潤を生じる。本例での経験から犬の ALL においても長期寛解が得られた場合には遅発性中枢神経浸潤を考慮した治療方針を準備する必要があると考えられた。